千曲川の歴史洪水から流死人菩提碑にかかる一考察

株式会社ティーネットジャパン 北陸支社　○ 須藤 治彦
一般社団法人北陸地域づくり協会 長野支所　髙橋 裕史
一般社団法人北陸地域づくり協会 長野支所　正会員 宮下 文夫

1. はじめに

長野市豊野町のしなの鉄道北しなの線豊野駅前に，流死人菩提碑(以下，菩提碑と記載する)と刻まれた小さな石碑が現存する（写真１）．この菩提碑の正面には「寛保二壬戌年八月二日流死人菩提大満水此所マデ湛」と線刻されている．正面以外に文字が見当たらないことから，誰が建立したものかは定かではないが，中尾村の人々が水位表示を兼ねた菩提碑を建てたという．菩提碑は犠牲者の供養とともに戌の満水の浸水高さを示し，後世に警鐘を鳴らすものであったと理解できるが，文献で扱う際に掲げられている写真をよく見ると，その写真の背景が異なり菩提碑の位置が移っていることに気づく．残念なことにこの菩提碑は，その時々の事情により元の位置，高さを変えて移転しているようだ．建立された菩提碑の願いもむなしく，令和元年洪水では支所，病院，中学校，交番，商業施設など豊野町の中枢がことごとく浸水し，長期にわたりその機能を喪失することとなった．筆者らは令和の大満水による甚大な被害を教訓とした地域の街づくりに向け，後世に警鐘を鳴らすべく建立されたこの菩提碑の元の位置を，特にその標高を復元すべく調査を行った．

写真１　菩提碑(現在の位置)

2. 調査の進め方

主として文献調査･聞き取り調査，現地調査を進めることとしたが，後段で示すように周辺地形の改変などもあり平面的な位置の特定には至らなかった．調査の進め方は次のとおりである．①菩提碑の現状とその移転の経緯，②周辺地名と地形特性の調査，③千曲川洪水位標に基づく洪水位の検討と検証．

3. 菩提碑の現状と課題

3-1. 文献による菩提碑の記載

菩提碑の当初の位置について豊野町誌に「煙外曰く碑は神代駅南半町許に在った」と記載されている[1]．なお，町誌の引用文献である原資料は不明である．豊野駅の南にあったとすると令和元年東日本台風による浸水域と差がなくなり，後段で説明する洪水位標の実績水位と差異があって疑問がある．この問題点を検討した結果，文献には神代駅とあって豊野駅とは記載されていないこと，開業当時から豊野停車場か豊野駅であったこと，事典によれば古代から宿駅と言い習わし交通路の利便な地点で旅人を宿泊させ，また荷物を乗り継ぐところで宿とはもともと駅家のことであるとされる．神代駅とは飯山街道の神代宿を指すものと解釈された．つまり神代宿の境から南へ約 50m に菩提碑があったと考えると整合し，この場所は現豊野駅付近の北側と解釈できる．また明治 5 年 9 月 1 日神代宿が神代駅に改められるとあった[2]．なお，後世につくられた略図に位置が示されているが，概略であって菩提碑の位置特定は困難であった[3]．

3-2. 豊野駅開業と菩提碑移転のはじまり

「右碑は信越線豊野駅創設の為一度移動され又道路拡張のため再び動かされて現在は多賀神社参道石階の中段の高所に移されて」とある[4]．明治 21 年開業の国鉄豊野駅工事のため菩提碑は駅敷地にある駅長宿舎敷地内に移設された．次いで道路拡張のため再び移設後，多賀神社の石段脇に移設されたと記載される．この道路拡張工事に該当するものとして昭和 33 年 7 月駅前線の工事が掲載されておりその可能性が高い[5]．郷土史家の金井清敏氏は「寛保２年戌の満水を歩く」の編纂の中で現在の位置が菩提碑の位置にふさわしいものではないと発言され，聞き取りにより戌の満水から 260 年目にあたる平成 14 年 9 月 1 日に豊野町教育委員会によって当初の建立位置に最も近い場所として，豊野駅北側で道路を挟んだやや西寄りの長野市商工会豊野支所横の子育て地蔵尊脇に移設されたことが判明した．

3-3.　菩提碑の現在位置と移転の経緯

菩提碑の移転経緯を以下に整理する(図１).

①当初建立の位置(現在の豊野駅北側)⇒②駅創設のため旧駅長官舎の一角へ移設(豊野駅北側西のはずれで現在の歩行者連絡通路の下り口付近(図２)⇒③道路拡張工事のため移設[6] ⇒④多賀神社石段脇(豊野駅北西に位置する中段の平場(写真２))[7] ⇒⑤現在の位置(子育て地蔵尊脇).

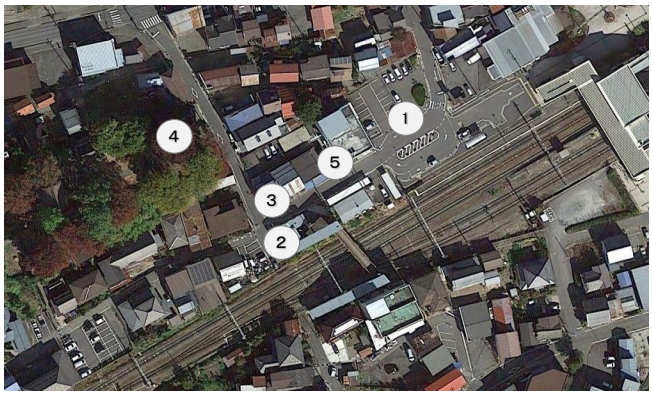


図１　菩提碑の移設経緯図

図２　昭和５年頃の豊野駅周辺図

写真２　多賀神社石段脇に移転された菩提碑

現地を調査すると駅長官舎敷地は軌道敷高さとほぼ同一で,移転当初は比較的高さが変化しないように移されたと考えたい．多賀神社は丘の上にありその中腹に移転され高さが現在の位置より 4m 程度高くなった．現在設置されている場所は平面的に移転当初に近い位置と思われるが,現在の軌道敷高さより高い.

4.　周辺地形と地名

4-1.　地形の概要と地名

先に述べたとおり戌の満水により上流域では大勢の人々が流死しこの地に流れ着いたとされる．その地形的特性を説明する．既知のとおり豊野町下流に位置する立ヶ花地点で千曲川の流れは幅 250m～400m の狭窄部に入る．長野盆地西縁断層が千曲川を横断する位置で高丘丘陵が形成され,先行河川である千曲川が狭窄部を形成してきた.一方,断層活動で東側は沈降し現２在の千曲川の右岸,東に延徳平,左岸,西に長沼,赤沼の低湿地帯を形成した．当時の千曲川には連続堤防はまだなく,流れの定まらない千曲川は右岸へ,左岸へと低地を乱流していたと考えられる．洪水時には両岸へ氾濫するとともに下流の立ヶ花狭窄部で流れが阻害され,せきあげが生じて水位も上昇する．こうしたことから現豊野駅周辺では流れがよどみ,流死者が流れ着いたと推測できる（図３).

図３　豊野駅周辺の低湿地図

先に触れた神代宿は山地部から千曲川へ向かう勾配地形の途中にあって比較的高い．そこから現在の豊野駅周辺に中尾村があり,さらに南へ千曲川の自然堤防上に赤沼の集落がある．中尾周辺には丘があって集落はそこに立地し氾濫被害を受けにくかった．中尾に比べ自然堤防上の赤沼は氾濫被害を受けやすかったが,

それでも集落周辺,特に中尾寄りの新幹線車両センター付近はさらに低い．流死者が流れ着いたという中尾周辺でも地名を見ると内土浮(うちどぶ),外土浮(とどぶ),沖などの地名に見られるような低湿地が現在でもみられる.

4-2. 中尾周辺の地形

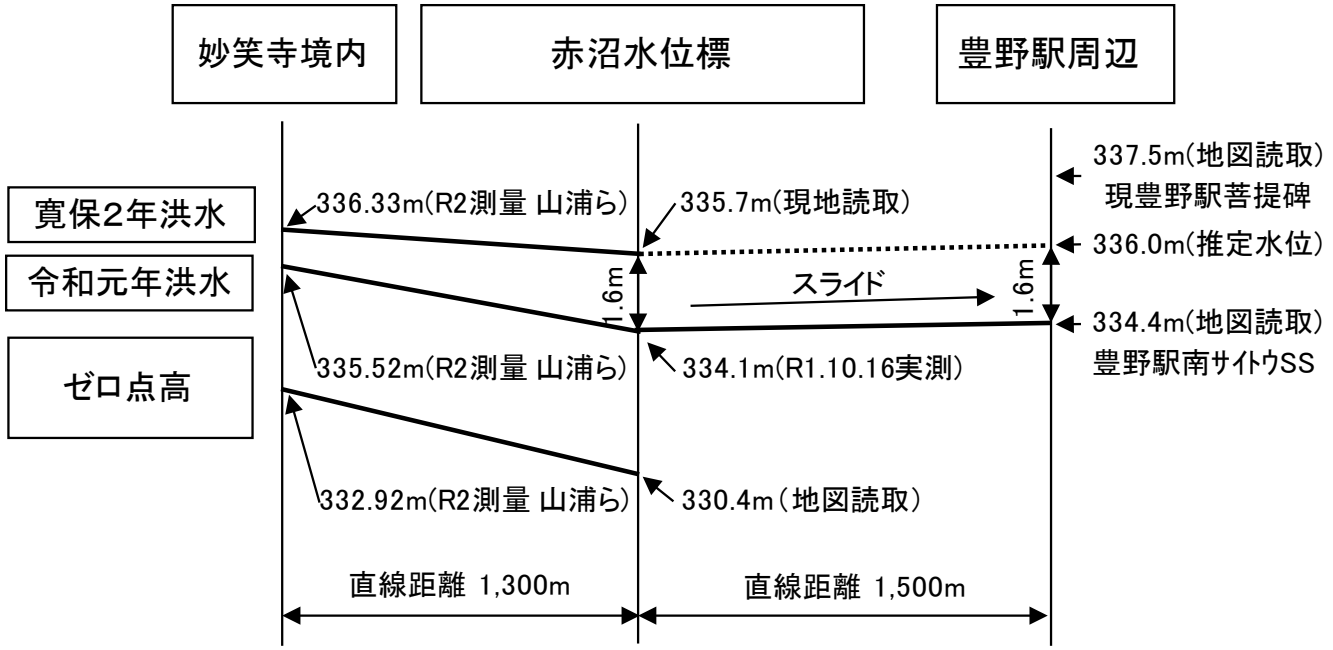
中尾周辺の地形について国土地理院地形図と現地調査・文献調査から述べる．現在の地形は豊野駅西側でしなの鉄道北しなの線軌道を挟んだ南北に丘陵があり,上神代から豊野駅北側に向かって緩やかな勾配をもって下る松代街道を東の境とする．それより東の豊野駅北側は平らで,軌道を挟んで南側は一段下がっている.またそれより南及び東は沖と呼ばれてさらに低地になっていく．しなの鉄道北しなの線軌道は長野方面から外土浮の低湿地を埋立て豊野駅に南北丘陵の間を通り,沖と呼ばれる低湿地の北境を上越方面へ向かっている.鉄道が敷設される前は丘陵が南北につながっており開削して鉄道を通したこと,さらに東側の現豊野駅周辺では蓮池と呼ばれる低湿地を土砂で埋め立てたことが記載されている．当初建立された菩提碑は豊野駅周辺の掘削や埋立てにかかり駅長官舎敷地に移設されたと記載されている[8]．また,豊野駅前も北に向かって高くなっていたところ,削平されて土砂は埋め立てに使用されたという．現在も豊野駅前の南北の通りは緩やかな勾配があって,例えば削平時にトロッコを敷設していたかもしれない．このように豊野駅周辺は地形が改変され,菩提碑の当初の位置は推測することが困難な状況にあった.このため,位置は豊野駅構内のどこかであったとして,その標高を推測することとした.

5. 戌の満水による浸水位の想定

5-1. 標高データの整理

現在の豊野駅構内の北及び南の標高,軌道敷高さ,現菩提碑の標高,元駅長宿舎の地盤高さ,千曲川洪水水位標(妙笑寺境内と赤沼)に記された浸水高さ,令和元年の豊野地域の浸水高さを整理した(図４)．現地形の標高は国土地理院タイルスケールから読み取った.

- 豊野駅構内の北広場(最低高さ)　EL336.8m
- 豊野駅構内の南広場(最低高さ)　EL334.4m
- 軌道敷　EL335.5m
- 現菩提碑　EL337.5m
- 元駅長宿舎の地盤高さ　EL335.8m
- 千曲川洪水水位標 妙笑寺境内(ゼロ点高 332.92m)
  - 戌の満水　EL336.33m
  - 令和元年　EL335.52m
- 千曲川洪水水位標 赤沼(ゼロ点高 330.4m)
  - 戌の満水　EL335.70m
  - 令和元年　EL334.16m
- 令和元年豊野駅周辺の浸水高さ
  - 豊野駅南サイトウＳＳ　EL334.40m



※豊野駅下流1,000m付近でも浸水深差なし

図４　戌の満水による浸水位図

妙笑寺境内の洪水位標は妙笑寺内柱に記録されたこれまでの浸水高さを境内に再現したものである．また赤沼の洪水位標は昭和 16 年に赤沼の深瀬武介氏が建てたものがはじめである．

5-2. 標高データの考察と豊野駅周辺の浸水位の推定

妙笑時境内で戌の満水と令和元年洪水の浸水高さの差は 0.81m で戌の満水が高い．次に赤沼洪水位標における洪水位は戌の満水と令和元年洪水の浸水高さの差は 1.6m で戌の満水が高い．ここで赤沼洪水位標における両洪水の差を豊野駅周辺の浸水実績水位にあてはめ戌の満水の浸水位を復元すると EL336.0m が得られる．ちなみに 3 地点の最高洪水位の違いについては妙笑寺が令和元年洪水の堤防決壊地点に至近で氾濫流の影響があること，また地形標高の違い，すなわち赤沼洪水位標地点が周囲に比べ最も低地であること，豊野駅周辺への氾濫流の流れは解明していないが豊野駅周辺から最も低い赤沼水位標周辺に流れ込みがあり，その間に動水勾配が生じていたと筆者らは想定している．

6. 戌の満水による浸水位の検証

前段で推定した戌の満水の浸水高さ EL335.94m と令和元年洪水の浸水高さ EL334.4m での浸水域を比較した．現在の国土地理院地図に「戌の満水」の浸水域は濃い青（EL336.0m）で示した範囲である．「令和元年洪水」の浸水域の範囲は薄い青（EL334.5m）で示している（図５）．多賀神社の丘としなの鉄道北しなの線をはさんで南側の中尾の丘が浮島のように見える．

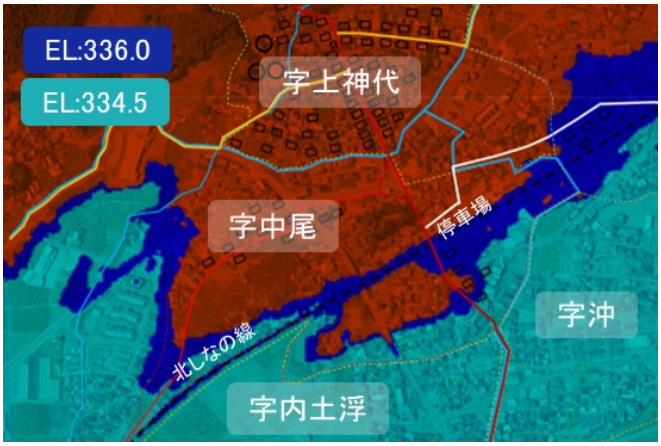


図５ 豊野駅周辺の浸水位図

4-2. 中尾周辺の地形で述べたように軌道を敷設するため丘陵が開削されたが，それ以前はこの丘はつながっていて浸水域は閉じられていた．また軌道と豊野駅周辺は低湿地であった蓮池を埋め立てており，実際は軌道北側まで浸水していたと推測される．このように戌の満水では丘陵すそ野は現在でいう豊野駅北の広場まで浸水し，上流で流された人々は中尾を中心とした東西にできたよどみの岸辺に流れ着いたものと考えられる．

7. 調査結果のまとめ

本調査では菩提を弔い後世への警鐘を目的とした豊野流死人菩提碑の移転経緯を豊野駅周辺の地形改変などを考慮し一定程度明らかにした．また，千曲川洪水位標を頼りとして菩提碑が記す浸水高さを推定することができた．おわりに寛保 2 年当時の人々の思いを継承し令和の満水の湛水位記録碑の建立を提案したい．今回調査を行うにあたって抽出された課題から，何らかの事情で記録碑が移動することもあり位置と標高を刻むことが重要であると考えられた．記憶が残るうちに豊野町内の浸水域を現地で明らかにし，地権者の協力のもと複数の記録碑を配置し後世に残す事業が望まれる．

参考文献

1) 豊野町史　豊野町公民館郷土調査部 pp. 39, 1960
2) 豊野町の年表　豊野町史４　豊野町誌刊行委員会 pp. 219, 1995
3) 豊野町の民族と地区誌　豊野町史 3　豊野町誌刊行委員会　pp. 242, 1995
4) 豊野町史　豊野町公民館郷土調査部 pp. 40, 1960
5) 豊野町の年表　豊野町史４　豊野町誌刊行委員会 pp. 432, 1995
6) 豊野町の民族と地区誌　豊野町史 3　豊野町誌刊行委員会　pp. 252, 1995
7) 千曲川の今昔　社団法人北陸建設弘済 pp. 25, 2001
8) 豊野町の民族と地区誌　豊野町史 3　豊野町誌刊行委員会 pp. 251, 1995